

〈論 説〉

アジア大環状文化圏 (3)

——ネパールと日本 (3.3) ——

明 石 博 行

はじめに

前稿「アジア大環状文化圏 (2) : ネパールと日本 (3.2)」(以下「アジア大環状文化圏 (2)」と略)において、アジア大環状文化圏の基本的な特質をふまえ、その起源に関する、要約的な考察をした¹⁾。その続稿として、本稿では、アジア大環状文化圏の起源と形成をめぐる補足的な考察を行なう²⁾。

アジア大環状文化圏に属する国々そして地域には、21世紀に独特の歴史的役割を演じるであろう国々や地域が数多く含まれている。20世紀の大国中心の国際関係認識は、いまだに主流をなす思考様式となっている。けれども、中小の国々や歴史的にきわめて大きな意義をもつ地域の認識は、前世紀の大国中心の秩序の変化をもたらしてゆく重要な要因を形づくる。たとえば、民主化や宗教思想の変化などをめぐるグローバルな動きは、大国中心の見方で充分に理解することはできなくなっている³⁾。

1) 「ネパールと日本」に関する諸論稿については、それぞれの表題をもって指示し、分割したものについては、副題の番号を付記する。

2) 「ネパールと日本」に関する連続的な考察として、「アジア大環状文化圏 (2)」とともに、本号に掲載した「アジア大環状文化圏 (1):「ネパールと日本 (3.1)」を参照されたい。

3) アジア大環状文化圏に属する国々や地域には、たとえば中国やロシアのような大国との関係においてきわめて重要な意義をもつ、したがって日本などにとっても重

本稿の考察も、そのような大きな変化を視野に含むかたちでなされることになる。本稿の考察のかなりの部分も、本来的には、経済社会学序説の研究に組み込むべきものである。けれども、その回り道を回避したならば、アジア大環状文化圏に関する十分な理解を得ることはできなくなる。補足的な考察部分が多くなりすぎるが、人類史の段階区分に関する考察をさらに深めることによって、アジア大環状文化圏の形成がもつ意義をいま少し明確にしてみよう。

1 人類史の三段階区分

人類史の三区分

ルイス・モーガンと彼の学説を継承したフリードリッヒ・エンゲルスの学説については、「ネパールと日本(2.1)」で紹介し、若干のコメントを加えた。これから、いま少し立ち入るかたちで、野蛮(savagery)・未開(barbarism)・文明(civilisation)という三段階に関する検討をさらに推し進めなければならない。その検討なしには、人類理解を検討してみよう⁴⁾。

モーガンやエンゲルスは、猿人・原人・旧人・新人という、常識化された(けれどもその内実はきわめて複雑な)人類史の基本区分が確立される前の、19世紀後半期にその学説を確立した。古代人骨に関する否定的な見解が支配的な時代で

要な意義をもつ変化をもたらす国や地域が数多くある。たとえば、民主主義の導入と定着という点では、この地域に属する国や地域のほうが、中国のような大国よりも早い時期に実現してゆく可能性が高い。ミャンマーやアフガニスタンなどをみるだけでも大きな困難があることはすぐにわかるが、いまはまだ発展途上国に位置づけられてはいても、急速な経済発展とともに、民主化に向かう変化が潜在的に、あるいは確実に進展しつつある国々や地域は多い。ネパールもその一例となっている。いま少し視野を広げるならば、現在のロシア・ウクライナ戦争の渦中で、ローマ・カトリックとギリシア正教の分離の歴史には新しい変化が生じつつある。アジア大環状文化圏に属する中央アジアの諸国・諸地域の変化とも関連するかたちで、経済思想や政治思想のみならず、宗教思想においても、興味深い変化が生まれている。それらはアジア大環状文化圏の内外の国々や諸地域にも、新たな変化をもたらしてゆくであろう。

⁴⁾ モーガンの業績については、主として彼の主著である『古代社会 Ancient Society』による。モーガンのこの著書については、ネット資料でその記述を確認できるので、引用ページなどは省略する。

はあったが、ネアンデルタール人の存在はすでに知られていたし、クロマニヨン人たちの人骨もすでに発掘されていた。旧石器時代と新石器時代の区別もすでに確立されていた。けれども、モーガンもエンゲルスも、旧人と新人の区別などに立ち入ることはしなかった。当時としては、それは妥当な判断であった。

モーガンが先駆的な考古学的発掘の成果をふまえていたことは、『古代社会』の「序言」で、地球上の人類がきわめて古くからいることが確証されているとし、「その証拠がようやく最近の30年以内に発見され」た、と述べていることでもわかる。しかし、モーガンも、そしてエンゲルスも、旧人や新人に関する考古学的な分析に依拠して人類史の三段階区分をしたわけではなかった。彼らは、アメリカ原住民の生活や西ヨーロッパの古典的文献の研究成果をもとに、野蛮・未開・文明という三段階論を構築した。

それらの段階は、猿人や原人、そしてネアンデルタール人のような旧人とサピエンスたちとの区別と関連をふまえて確立されたものではなかった。その点において、そこには学説上の基本的な限界があった。モーガンも、ヨーロッパからの移民である白人系の知識人であった。だから、ヨーロッパからみたときの新大陸の先住民の文明や文化に対する西欧文明の優位性の認識は、彼の意識のなかにもあった。そこには先住民に対する一定の差別意識とみられる要素もあった。

けれども、モーガンの歴史認識も、またエンゲルスの歴史認識も、一方的な進歩史観ではなかった。未開社会が文明社会へと発展してゆくときに、未開社会の優れた要素が失われていったという変化を、モーガンもエンゲルスも把握していた。彼らの発展段階論は、文明がさらに発展してゆく過程で、未開社会の優れた要素が高次の段階において復活してくるという展望をもって、未開社会と文明社会との関係を捉えていた。

モーガンやエンゲルスが未開と文明の関係を単なる直線的な進歩史観のようなかたちで理解したのではないということは、モーガンたちの所説に対する評価でしばしば見失われているといってよい。エンゲルスの所説に対してもそうであるけれども、西欧文明をつねに高次のものとみなしてアメリカの原住民に

あい対していたというような思い込みにもとづくモーガン評価は、彼の所説を正確に理解したものとはいえない。モーガンにもエンゲルスにも、歴史的な限界はあった。けれども、彼らの歴史認識は単線的な進歩史観とは異なるものなのだということは、前提としてふまえておかなければならない。

高次の復活を含んだ発展段階の把握というものを理解できなくなった人々が、現在では多数派となってしまった。けれども、社会科学的な認識として、人類史における発展段階の差異と区別は存在する。その事実を認めることは、文明社会がそのすべてにおいて未開社会よりも高次の社会だとみなすことではない。文明社会と未開社会を段階的な差違として区別するということは、社会的な差別を助長することではけっしてない。多様性をふまえた新たな共生関係を構築するためにも、段階の差違に関する基本認識をしっかり把握しておかなければならない。

野蛮・未開・文明という三段階論は、1989-91年革命が起こる前までは、一定の影響力をもち続けていた。けれども、1989-91年革命後にマルクス主義史学の権威が後退するとともに、その影響力を失うようになった。その結果、単線的な進歩史観とモーガンやエンゲルスの発展段階認識との差異を認識することができない論者たちが、専門家のあいだでも、圧倒的といってよいほど増えてしまった。専門的な考古学研究者のなかには、この三段階論を「くびき」と評する人もいる。あえて論評することもなく、ただ無視するだけの研究者たちも多い。専門領域のことではないから断定は避けるけれども、無視派が大勢を占めているとあってよいのかもしれない。

だが、モーガンやエンゲルス、そして20世紀のマルクス主義の歴史学者たち、あるいはその学説を受容した歴史家たちの三段階論は、捨て去って顧みる必要のなくなった学説なのだろうか。たしかに、考古学の研究などが深化した現在では、彼らの所説はそのままのかたちでは継承できない。にもかかわらず、アジア大環状文化圏の形成史のような具体的な歴史を顧みるとき、人類史の三段階論がやはり大きな意義をもっていたことは、忘れるべきではない。

表1 モーガンおよびエンゲルスの人類史区分

大区分	小区分	開始の画期となる事象
VII文明	近代	羅針盤、火薬、印刷技術、また、望遠鏡、石炭ガス、紡績機、動力織機、蒸気機関など
	中世	ゴシック建築、封建貴族制、法王を頂点とする教職政治など
	古代	音標文字の発明と書字の使用
未開	VI上層	鉄鉱溶解法の発明と鉄器の使用
	V中層	動物の飼育(南半球)、穀物および植物の栽培と日干レンガ・石材の使用(西半球)
	IV下層	土器の発明
野蛮	III上層	弓矢の発明
	II中層	漁労と火の知識の獲得
	I下層	人類の揺籃期

モーガンとエンゲルスの知的遺産

繰り返しを含むことになるけれども、いま一度、モーガンとエンゲルスの段階区分を表1として再整理しておこう。モーガンが直接的なかたちで段階区分をしたのは、野蛮(下層・中層・上層)、未開(下層・中層・上層)、および古代文明についてまでである。VIIの文明状態の内部区分は、第1編第3章「人類進歩の比率」の記述によって補足を加えた。文明期中世と近代については、モーガンは、画期となる代表的な技術的変化をひとつに絞ることができないと考えていたのであろう。

考古学的な知見を十分にふまえることができなかった、モーガンやエンゲルスの野蛮・未開・文明という三段階認識には、たしかに限界もあった。また、この三段階認識やその用語法のなかには、人種差別的な偏見を助長しかねない要素も含まれていた。たとえば、日本語の「野蛮」に対応する英語には、古代のギリシア人が東方の民族に対する蔑称として使ったギリシア語のバルバロイから派生した barbarism と、残忍さを強調するニュアンスを強くもつ savagery がある。モーガンは、日本語訳で野蛮と訳されている語に savagery を使い、未開と訳されている語として barbarism を使った。さまざまな留保条件を無視してそれらの用語法だけを見ると、そこに一定の人種差別的な要素が埋め込まれているということは、否定しえないであろう。

けれども、文明人とされる近代人や現代人が戦時にいかに狂暴化したか、あるいはしているかをふまえるならば、文明化されたサピエンスの歴史と文化のなかに、克服されるべき savagery や barbarism が埋め込まれていたし、いまでも埋め込まれていることを忘れるべきではない。文明社会に変化と発展の過程においては、かつてのナチズムや日本の軍国的統制社会にみられたように、未開社会よりもはるかに大規模かつ残忍なかたちで、野蛮の高次の復活がなされたという現実もあった。人間の野蛮性というものが21世紀の文明社会でも復活し、新たな展開を遂げるということは、今日のロシア・ウクライナ戦争の渦中におけるロシア社会の現実をみるだけでも理解できよう。

モーガンの人類史の三段階論には、アメリカ先住民たちの未開文化を文明の段階よりも低次のものと位置づける内容も含まれていた。しかし同時に、彼の未開社会論のなかに、文明社会をさらに発展させてゆくときの未開社会の特質の高次の復活という展望が含まれていたことは、『『ネパールと日本』再考』で指摘しておいたとおりである⁵⁾。文明と未開との関係においても、未開と野蛮との関係においても、それは単線的な発展関係ではなく、弁証法的な否定の否定という関係性を含むもののだということ、ふまえておかなければならない。

モーガンやエンゲルスの学説には、一定の限界があった。しかし、その限界のみを面的に強調して一方的に批判したり、無視したりすべきでない。モーガンやエンゲルスは、文明社会と未開社会との関係においても、未開社会がなし遂げた偉大な発見と発明を高く評価し、その優れた面を把握していたからである⁶⁾。

21世紀の経済社会においても、ロシア・ウクライナ戦争の推移をみればわかるように、ネオ・ナチズムのような動きが新たに復活し、未開の社会ではありえなかった高度な武器を使い、まことに残忍な殺人や破壊が現実に行なわれている。そのような現実を乗り越え、平和な社会を再構築してゆくためには、未開社会に存在していた「古代氏族の自由、平等そして友愛のより高度な形態に

⁵⁾ 拙稿『『ネパールと日本』再考』、『駒大経営研究』第49巻第1・2号、66-67ページでまとめておいた、第1から第3までの指摘を参照されたい。

⁶⁾ さしあたり前掲拙稿『『ネパールと日本』再考』の78-85ページを参照されたい。

おける復活」という課題を、具体的なかたちで実現してゆかなければなるまい。

新自由主義の神話が崩壊したあとの21世紀の社会における、個々の国や地域の動向をみてゆくと、また一定の社会的な発言力をもっている人々の言動をみてゆくと、ファシズムやナチズム、そして日本軍国主義の新たな復活と展開といえる動きがよくみられる。「言っちゃいけないことはたいてい正しい」などといった、稚拙な言説ないし「理論」が横行するような状況もある。モーガンやエンゲルスの野蛮・未開・文明という発展段階論を単線的な進歩史観と同一視して、一面的な批判をしたり無視したりするということも、そのような時代の風潮と無縁ではない。

研究者たちのなかにも、野蛮と未開という人類史上の区分を認めようとしていない人々もいる。日本では、バーバリアンを野蛮人と訳してしまうことが多いので、いっそうその感が強くなる。1989-91年革命ののち、野蛮・未開・文明という三段階区分については、さらに多くの疑念がもたれるようになった。なかには、それを「くびき」だと評した人もいる。しかし、文明後の社会への模索がすでに始まっていることをふまえるとき、この三段階論の歴史的な限界を認識しつつ、その区分をさらに発展的なかたちで再構築する方向を探ることが求められていよう。

原始社会と未開社会の区別

モーガンとエンゲルスは、弓矢を使うようになった段階から野蛮の上層に入り、土器を作って使うようになった段階から未開の下層の段階に到達すると考えた。弓矢や土器が生産力を新たに発展させ、生活様式を変革するうえで大きな役割を演じたという認識そのものは、たしかに正しい。けれども、以前に指摘したように、弓矢の使用と土器の使用の開始は、いずれも2万年前を前後する時期であり、それらの伝播と導入の過程に地域的な差違があったのだと思われる。

投槍器や弓矢の導入と土器の導入とでは、生産様式や生活様式に与える影響はかなり異なる。ヨーロッパの多くの地域では、土器の導入はかなり遅れ、投槍器や弓矢のほうが土器よりも早い時代に導入された。しかし、アジア大環状

文化圏での土器の導入は、2万年前を前後するかたちで、かなり早い時代になされた。また、日本列島の平野部のように、動物資源や植物資源が限られている地域では、落とし穴を使った管理的な狩猟がなされ、弓矢を必ずしも必要としなかった地域もあった。土器の発明と弓矢の発明とはそれほど时期的な差はなかったと考えられるのであって、それらの技術を導入して発展させる過程が、それぞれの地域ごとで異なっていたのだと把握すべきであろう。

したがって、弓矢の導入と土器の導入とは、時間的・時代的な差違として区分するのではなく（個々の地域によって異なる時間差・時代差はあった）、地域的・空間的な広がりや差違として、認識すべきである。とはいえ、弓矢と土器の導入がもたらす経済社会の変化には、やはり差違がみられる。弓矢そして投槍器は狩猟用具であり、動物の殺傷能力を高めることによって生産力を上昇させるという点で、野蛮性（残忍性）がより強い。土器のほうは、食物の保存や加工を容易にするというかたちで、野蛮性（残忍性）よりも未開的な平等を強める方向で作用したであろう。

出アフリカ後のサピエンスの社会は、新しい、N型の新石器時代へと移行していったといえる。出アフリカ後のサピエンスたちの社会は、石器を改良する能力と土木石骨利用の能力でネアンデルタール人たちの社会よりも長けていた。社会的に高い生産力とより豊かな生活様式をもつようになっていたのである。その変化をふまえるならば、ネアンデルタール人のような旧人と現生人類であるサピエンスたちとの交替の過程で、野蛮と未開とを区分するのが適切なのではないかと思われる。

弓矢や投槍器の導入と土器の導入と発展は、いずれも未開社会の新たな発展をもたらした。しかし、地域的な動物資源の多寡、動物や他の共同体との共生の在り方が異なることによって、それらの導入の仕方や速度は地域ごとに異なっていた。したがって、出アフリカ後のサピエンスたちの経済社会は、未開段階の地域的な差違を2万年前後の時期からしだいに明確化していったとみなすのが、適切な判断なのではなかろうか。弓矢も土器も、それぞれ技術的な発展が地域ごとに異なるかたちでなされた。それらの技術を導入しない地域もあったし、

改良された弓矢と土器を選択的に組み合わせてその発展を図る地域もあった。そのような社会的選択の在り方によって、地域ごとの文化的な特性が分化していった時代が、サピエンスたちの未開社会の発展過程だったといえよう。

投槍器や弓矢を多用する社会では、それらは動物たちに用いられるだけではなかった。人口の増加していった地域では、他のサピエンスたちを殺傷する道具としても用いられた。サピエンスの内部での闘争や戦争を拡大する要因としても作用したのである。しかし、土器使用の拡大を通じて生産力を発展させ生活様式を改善できた社会では、闘争や戦争をすることなく、共同体相互の共生を強めることができたのではないだろうか。日本列島におけるN型新石器時代の土器文化時代であるいわゆる縄紋(縄文)時代に、比較的長い平和的な状態が持続されえたのは、地域環境との共生関係を工夫した技術選択の結果でもあったと考えられる。

投槍器や弓矢が使われ、土器が導入されるようになった社会は、未開段階での新たな発展がなされた社会といえる。しかし、その段階でサピエンスたちの未開社会の発展が終わったわけではない。牧畜や農耕の発展と結びついた食料生産段階の到来とともに、未開社会のさらなる発展が画されることになった。この食料生産の段階でも、牧畜を主とするか、農耕を主とするかで、地域的な環境の差違とも結びついた、社会的な選択がなされたといえる。農業社会を進化・発展させる方向で経済発展を図った地域もあれば、牧畜社会を進化・発展させる方向で経済発展を図った地域もあった。その選択とも結びつくかたちで、基本的に農耕を主軸とするようになった広い平野部をもつ地域と騎馬遊牧民族型の発展を図る地域との文化的な差違が、より鮮明になっていったといえよう。そのような差違が、中華文明や古代インド文明のような農業地域を主軸とする文化と、騎馬遊牧系の文化を重要視する国や地域が多くあるアジア大環状文化圏の文化との差違をもたらすようになったのだ、と思われる。

このようなかたちで、金属器が広く導入され、文明が発展してくる前の段階で、サピエンスたちの未開社会の発展の段階と様相が地域によって異なっていた。サピエンスたちは、すでにグローバルな展開をしつつあったが、その未開

表2 石母田正による日本史の段階区分

大区分	小区分	日本の主要な時代区分
文明	近代 近世 中世	(略)
	古代	中期古墳以後の時代(倭の五王の時代)
未開	後期	前期古墳時代
	前期	弥生文化の時代
野蛮	後期	縄文文化の時代
	前期	旧石器時代(無土器文化)

社会の文化は地域的な特性をしだいに明確化するかたちで分化していった。その過程で共同体や民族形成の在り方の差違が生まれるようになり、地域ごとに差違をもつ歴史が形づくられていったのだといえよう。

石母田正による野蛮・未開・文明の三段階区分

モーガンとエンゲルスの三段階論をふまえ、サピエンス史における未開社会の発展段階と地域的な差違に関する要約的な解説を終えた。以上の指摘をふまえて、前稿ではその検討を留保した、第1期の岩波講座『日本史』の巻頭論文であった石母田正の「古代史概説」を検討してみよう⁷⁾。この論文には、再評価されるべき要素が数多く含まれていると同時に、乗り越えてゆくべき要素も多くあるからである。

前稿でふれたように、石母田正の巻頭論文「古代史概説」は、モーガンやエンゲルスの時代区分を部分的に継承した。表2で概要を整理したように、石母田は、野蛮の段階を前期と後期に、未開の段階も前期と後期に分け、四世紀末・五世紀の倭の五王の時代に文明の段階に入るとした。彼は、「三段階が、それぞれの内部の小区分にたいしてもつ画期的な意義を強調するために、また考古学と歴史学との時期区分の統一、原始社会と古代社会との連結のためにも有用

⁷⁾ 石母田正「古代史概説」、『日本歴史 原始および古代1』、岩波書店、1962年、所収。本論文は、『石母田正著作集』の第11巻に収録されているが、引用は、前記の『日本歴史』による。

かつ必要」だとした。いま少し詳しく、この段階区分をみておこう。

(1.1) 野蛮の前期 「まだ土器と磨製石器をもたない段階であり、その大部分は旧石器文化に属する。生活資料獲得の主要な形態は、狩猟と漁撈であり、すでに火の使用を知っていた。各種の打製石器は、この段階のなかにも石器加工の技術的発展の諸段階があり、それを通じて道具の分化がおこなわれたことを示し、その末期に存在したとみられる手槍・投槍はかれらの狩猟経済に一時期を画した。「かれらは、日本列島の大陸からの分離以前に渡来した前期旧石器人の後裔であろう」。

(1.2) 野蛮の後期 「西紀前七千年—八千年頃にはじまるとみられる縄文文化の時代は、それが採集経済であるという基本的特徴によって、前期と同じ野蛮の段階に区分する必要がある」。だが、「ここには画期的な発展があった」。

- (a) 「多様で精巧な骨角器にみられる狩猟経済の進歩と安定」。
- (b) 「人間の蓄積された経験と智力を前提としている弓……と、石鏃の出現による狩猟の正常な労働部門への発展」。
- (c) 「土器の製作の開始、あのおどろくべき縄文式土器……の使用による食料の種類のいちじるしい拡大と計画的な生活の最小限の保証」。
- (d) 「磨製石器の出現による前期と比較にならない石器の多様な種類と用途……の拡大、それによる木材の伐採、したがってかんたんな住居建築と端緒的な定住生活の可能性」。
- (e) その他、「植物質の衣料、家犬の飼育、丸木舟と櫂」。

この野蛮の後期は、「列島の自然的条件と採集経済という制約のもとでの最高の、かつ未開段階へ移行を可能にするだけに成熟した生産力——原始農耕の存在の可能性さえ——発展させた」。だが、「その社会組織は、抜歯の風習……にみられる強い共同体、呪術的な、主として女性をかたどった土偶のしめしている母の権威、小型の石棒を統率者の象徴とした共同体の首長等からみて、呪術宗教の支配する血縁的氏族＝クラン共同体の段階にあったとみなされる」。

未開の段階は、「水稻を栽培する農業社会である点で、採集経済の野蛮の段階と根本的に区別される」。

(2.1) 未開の前期 未開の前期は、「西紀前三世紀頃から西紀三一四世紀頃までつづく弥生文化の時代」で、その特徴はつぎのようである。

- (a) 狩猟・漁労のまだ無視できない重要性にもかかわらず、「水稻農業がさまざまな規模において——……低湿地を利用した簡単な水田から、大量の労働力を畔畦その他人工灌漑設備に投入したとみられる後期の登呂型的水稻経営にいたる——、経済の基本として確立」される。
- (b) 「簡素で画一的な弥生式土器は、土器生産における分業のある程度の発展を前提とし、金属器はもちろん石器生産……においても社会的分業、とくに共同体間の分業の一定の発達がみられる。舟船の製造技術の発達には、この時期に特徴的な大陸との交渉および国際間の分業……を可能にする条件をつくった」。
- (c) 「石製・土製の紡錘車および木製の機織具——唐古・登呂等——にみられる機織の出現は、男性労働力の農業への集中の必要とあいまって、野蠻段階から存在した性的分業を一層強化し、固定させた」。
- (d) 「農業は前段階にはみられない安定した生産力と若干の剰余生産物をもたらし、村落への定住を確立し、新しい土地の開拓、人口の増加、端的な階級分化を可能にした」。
- (e) 「金属器の使用」。「銅矛・銅剣・銅鐔等の青銅器は、儀礼的な宝器は別としても、鉄器の使用の事実からみて、この時期を未開後期に属させる方が妥当とさえみえる」。

しかし、(イ)「この時期の農業生産力を決定する特徴的な農具はむしろ木製農具であり、鉄製工具の役割は、道具の大半を占める発達した木製道具……の製作にたいする貢献」にあり、(ロ)石器が「重要な役割を果たし、その末に近づくと、おそらく鉄器の普及と関係して、それが消滅してゆく」のであって、未開後期の特徴である「鉄製の耕耘器」による「開墾や田野耕作を欠く故に、未開前期とする方が妥当であろう」。

(2.2) 未開の後期 未開の後期は、「前期の終末から、文字の使用される文明の段階、倭五王にいたるまでの、すなわち前期古墳の時期で、その期間が地域に

よってひらきをみせるのは当然である」。「それは実用品としての石器の消滅によって、また木製農具のひろい残存にもかかわらず、鉄製農具……による開墾・耕作の確立によって特徴づけられる」。

「未開の段階のもっとも重要な現象は、水稻栽培による生産力の発展と剰余生産物の蓄積を基礎にして、原始共同体の解体、支配階級の成立の第一歩が踏みだされたことであって、未開前期に属する西紀一域前後にすでに北九州を中心とする先進地域に発生した百余国の『クニ』は、支配階級に成長しつつある共同体の族長、すなわち甕棺の被葬者たちの権威のもとに組織された政治的社會であった」。

石母田正の日本列島史把握と野蛮・未開の段階把握

このような石母田による日本列島史の野蛮の前期段階と後期段階の理解は、今日では、基本的に維持できなくなっていよう。すでに解説したように、新しいN型の新石器時代論をふまえるならば、日本列島にサピエンスたちが到達し、サピエンス社會を形成するようになった段階は、すでに新石器段階の未開社會となっていたとみるべきである。したがって、古いO型の旧石器段階として、無土器文化の旧石器時代と土器を導入した縄紋(縄文)時代があったとみるべきではない。N型の新石器時代の未開社會を無土器文化であった段階と土器を導入した土器文化の時代とで区分し、N型の新石器時代の段階区分をすべきであらう。

土器文化を形成し発展させていった時代を「縄紋時代」とよぶかどうかは、學術用語の選択の問題である。正確なかたちでは、それは「土器文化発展型の未開社會」とでも特徴づけることができる社會であった。しかし、日本社會の伝統的用語法を尊重するならば、それを縄紋時代とよんでよかろう。「縄文」という表記にこだわる人もいるが、縄紋時代はまだ文字の時代ではなく、「紋」が重きをなす時代であった。それは、紋様に差違によって、共同体の性格がわかる社會であった。無紋の土器であっても紋がないという点において、また櫛型紋であっても縄紋とは異なるという点でそれを使用する共同体の性格が表示さ

れる時代、それが縄紋時代であった。

縄紋時代が日本で1万年以上続いたということは、未開社会におけるひとつの技術選択と結びついた社会選択の結果であった。弓矢をすでに使用するようになっていたが、動物たちを殺傷する能力の強いものではなく、したがって戦争の道具としても使える殺傷力の強い弓矢はあまり発展しなかった。むしろ、漁労の道具としての性格が強い弓矢が発達し、そのため弓矢の形態も漁労に適するものに変形された。狩猟においても、落とし穴が多用されたのであって、共同体による管理型の狩猟がなされたとみてよいであろう。

この縄文時代になされた技術的・文化的な発展に関する石母田の指摘は、今日においても参照に値するものである。石母田が指摘したような技術や生活様式の大きな発展が縄紋時代にもたらされた。地域的な差違をふまえて緻密化する必要はあろう。また、縄紋時代からダイズやアズキなどの初期的農耕が始まっていたこともふまえなければならない。しかし、縄紋時代を日本列島におけるサピエンス社会たちの未開社会のひとつの段階と把握するならば、石母田の縄紋文化に関する指摘は今日でも大きな意義をもっている。

日本列島におけるサピエンス史の全体を未開社会から始まると把握しなおすならば、稲作の導入とともに本格的な転換がなされたという認識そのものは維持できよう。稲作の導入と土器の形式の変化とは深く結びついていた。したがって、日本列島における未開社会の新しい発展が稲作の導入によってなされたことを象徴する言葉として「弥生時代」という用語を用いることは、日本列島史に限定するならば、それを否定しなくてもよいように思う。

弥生時代という用語は便利なので列島史に限定するかたちでそれを用いるが、弥生時代は基本的に金石併用時代であった⁸⁾。その発展過程は身分差別を固定化し、階級関係をしだいに発展させてゆく時代であった。したがって、弥生時代に日本社会は階級社会へと移行していったのであり、それは国家権力を

⁸⁾ 日本での弥生時代論は、ひとつの特殊理論としてそれを論じなければならない。日本には日本なりの学説史の発展過程があり、金石併用時代の認識と結びつくかたちで弥生時代認識は形成された。その過程については、別の機会に論ずることとする。

しだいに形成していった時代でもあった。弥生時代は国家形成の土台を築いた時代であり、その発展過程でさまざまな地域権力が育っていった。

その過程の帰結として、墳墓の様式も変化していった。日本で古墳時代とよばれる、庶民とは大きく異なる権力者の墓が突出するかたちで形成される階級社会の時代が到来することになる。それは日本列島における鉄器の普及過程とも重なるものであった。その過程のさらなる分析と記述はここでは控えることにしたい。

文明社会と前文明社会

モーガンやエンゲルスが用いた前文明社会の段階区分の指標は、そのままのかたちでは維持できない。彼らはサピエンスたちの社会を野蛮と未開に区分したが、これまで述べてきたように、出アフリカ後のサピエンスたちの社会はすでに未開の段階になっていたものとして把握するほうがよい。野蛮と未開との区別は、旧人と出アフリカ後の新人とのあいだでなすべきである。

野蛮と未開の内部における段階区分をするとき、モーガンやエンゲルスのように、未開段階のサピエンス社会を三段階に内部区分するのか、石母田のように二段階に区分するのかといった点も、あらためて考えてみなければならない。サピエンスたちの社会として日本列島の経済社会史を区分するならば、(1) 無土器文化の時代、(2) 土器使用に弓矢などの使用が併用された時代（縄紋時代）、(3) 稲作が導入され、また金属器も導入されるようになり、イヌ以外の飼育動物の導入も試みられるようになった時代（弥生時代）、(4) 金属器の使用が進み、都市と村落の分離が進むなかで、地域権力が大きく発展するようになった時代（古墳時代）、といった時代区分はできるであろう。

このような区分は、地域ごとに異なる様相を帯びる。したがって、地域分析を重ねたうえで、どのような地域区分をしたうえで整理ができるかを考え、地域なり、圏域なり、国なりといった領域区分をし、具体的な分析を進めてゆく必要がある。具体的で詳細な段階区分の在り方については、地域ごと、あるいは国ごとの特性に応じた異なる区分を考え、地球的規模のある程度まで統一さ

れた区分との対応関係を明確にしてゆけばよい。

けれども、モーガンやエンゲルス、そして石母田が試みたような段階区分を単なる過去の遺物とみなして無視すべきではない。19世紀的な限界はもちろんある。石母田のような区分も、そのままのかたちでは、妥当性をもちえない。しかし、先駆的な研究は、たとえ限界をもつとしても、やはり意味がある。廃棄物にすべきではない。

2 認識の転換と用語の改善

認識の転換と用語の改善

とはいえ、モーガンやエンゲルスが使った savagery や barbarism、またその訳語として用いられてきた野蛮と未開という用語には、一定の差別的な用語としての性格がある。モーガンやエンゲルスの段階認識は、単線的な進歩史観のような段階区分ではなかったが、歴史的制約を免れることはできなかった。「文明化されていない (un-civilized)」とか「前文明 (pre-civilized)」という婉曲な表現でも、あとの発展段階のほうが上という意識はついてまわるであろう。

発展というものは、同時に後退とか退化とか喪失というべきものを含んでいる。文明についてもそうで、文明によって失われたものへの郷愁はつねに残る。同時に、さらなる発展が図られるときには、過去の失われたものが再発見され、再認識されることによって、新たなものとして再生するということが起こる。文明社会への発展についても同じであって、文明後のさらなる発展が図られるときには、いったん失われて消失したように考えられていた前文明社会の要素が再生し、さらなる発展が起こるのであろう。前文明社会についての考察ないし探求は、そのような要素をもつ社会として、試みなければならない。

そのとき、前文明社会は野蛮な社会であり、文明社会はもはや野蛮な社会ではないというような二分法で人類史を整理しきれぬだろうか。人類史を野蛮と文明とに二区分するというような歴史認識はたしかにある。文明人でなければ野蛮人であるという捉え方は、一般によく知られていることであるし、un-

civilized (un-civilised) という英語を野蛮と訳すようなことも、翻訳書ではしばしばなされている。そのような訳語が用いられるということは、人類を野蛮人と文明人に二区分するという常識が広く浸透していることの反映であろう。そのような区分もできないことはない。しかし、人類史の整理の仕方としてそれはあまりにも粗雑にすぎよう。

前文明社会についてもさらなる時代区分が求められるのであって、野蛮と未開という用語について再考する必要がある。けれども、前文明社会をさらに大区分し、それらをさらに細区分して分析してゆくことは、人類史の総体的な分析と認識にはやはり必要かつ不可欠である。

考古学的な研究を推し進めてゆくと、野蛮とみなされた社会では、地球の自然的自然を壊すことなく、自然との共生が図られていたことを認識させられる。未開とされた社会でも、さまざまな動植物や他の人類種を絶滅に追い込むことがありはしても、その破壊を一定の限度内に抑制し、共同社会の存続を図ってゆくような社会制度が確立されていたことを認識させられる。

そのような野蛮とか未開とかよばれてきた社会の意義を再認識するとき、野蛮・未開・文明という三段階認識は、用語を改善すれば、今日でも意義をもつ人類史の区分であるといえる。野蛮・未開・文明の三段階区分と旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代という時代区分を統一的に理解しようとした石母田正の歴史認識も、その点で再評価すべきものであろう。これらの点については、いまし考察を加えておかなければならない。

人類史の三段階把握の再定義

用語をやや変えるかたちで、野蛮・未開・文明という人類史の三段階論を考えてみることにしよう。人類史の形成と発展の過程には、のちの文明社会の社会基準からみると、残忍な性格が認められる。だが、野蛮とみなされた社会の人類が、たえず殺し合いをしていたなどということはない。野蛮とされた人類種も、幼い子どもを育て、共同社会を形成して、全体としての安全を図っていた。ネアンデルタール人とサピエンスたちの文化には、死者を悼み埋葬する文

化も、基本的に根づいていた。

ネアンデルタール人までの原始社会に比すと、サピエンスたちの未開社会では、戦闘はしだいに大規模化し、一部の人間が生き残るための殺人や殺傷の規模は拡大した。そのような殺人や殺傷は、兵器の殺傷能力の向上と結びつくかたちで、文明社会でも継続され、拡大した。それが人類史の一面の現実であり、それを否定することはできない。狩猟道具を発展させた未開社会のサピエンスたちは、大型獣を狩りつくし、絶滅させてしまった。地球破壊へと結びついてゆく端緒は、未開社会のなかで形づくられ、文明社会で発展した。資本制の「豊かな社会」が地球規模で広がることによって拡大した地球破壊は、人類の生存を脅かす社会的脅威を拡大し、顕在化させた。

野蛮といわれる社会は、人類社会のなかでも、もともと自然破壊が抑制されていた社会でもあった。未開といわれる社会でも、定住化が進み、他の共同体社会との共生を図らなければならなくなると、自然破壊を抑制するための社会制度が整えられていった。共同体ないし共同社会の成員に対する思いやりや保護という点でも、野蛮とか未開といわれる社会のほうが、制度的な保障が整えられていた面もある。文明社会の発展とともに、自然破壊の規模が拡大し、共同体による生活の保障を破壊してきたという一面があることも、否定しがたい事実である。

したがって、野蛮・未開・文明という一方向的な発展関係のみを捉えるのではなく、自然や他の人間との共生関係もそこで変化しており、その共生性は後退を含んでいるという認識をふまえて、人類史の三段階を再把握する必要がある。用語的にもそれを明確にするため、人間と自然との関係性および人間相互の社会的関係性における共生関係を包摂するものとして、

- ・野蛮的共生
- ・未開的共生
- ・文明的共生

というかたちで、共生関係の把握を用語に加え、野蛮・未開・文明の再定義をすることにしよう。

表3 野蛮的共生社会と未開的共生社会の再整理

大区分	小区分	時代の転換を象徴する 生産交通様式の発展	人類種	日本列島等の動向
未開的 共生社会	後期	動物飼育およびマメ類などの 農耕の開始	新人	縄紋時代の発展
	中期	投槍器と弓矢、土器の発明と 使用	新人	縄紋時代の開始
	初期	定住規模の持続的拡大	新人(旧人の死滅)	日本列島への到達
	黎明期	磨製を含む石器の改良と筏・ 舟の使用、交易関係の持続的 拡大の開始 (N型新石器時代の開始)	新人	オーストラリア への到達
野蛮的 共生社会	後期	槍と着柄などの石器の改良 (N型中石器時代の開始)	旧人および新人	出アフリカと拡大
	中期	火の使用と定住化の開始	原人および旧人	出アフリカと拡大
	初期	打製石器の製造と使用 (N型旧石器時代の開始)	猿人および原人	出アフリカへ
	黎明期	直立二足歩行の開始	猿人	

今後も野蛮・未開・文明という言葉を使う。しかし、これらの用語は、野蛮的共生・未開的共生・文明的共生という、共生関係をふまえた用語の略語として用いることにする。

野蛮的共生社会と未開的共生社会

前稿で定義した石器時代の再認識をふまえて、表3として、この三段階のうち野蛮的共生社会・未開的共生社会の二段階と、時代の転換を象徴する生産交通様式の発展との対応関係を、石器時代と金属器時代との関係を中心に整理しておこう。また、おおまかな猿人・原人・旧人・新人という人類種の変遷との対応関係も整理しておく。さらに、日本列島へのサピエンスたちの到達とその後の列島史との関係も整理しておこう。

大ざっぱな対応関係でしかないけれども、野蛮的共生社会の段階は、これまで前期旧石器時代とよばれてきたO型の旧石器時代に対応しているとみてよい。二足歩行を開始した猿人たちは、きわめて初歩的なものであるにせよ、石器をはじめとする石製や木製の道具を制作して使用するようになり、旧石器時

代の猿人や原人たちはアフリカを北東端から歩いてユーラシア大陸へと渡っていた。原人たちは、ユーラシア大陸の各方面への生活領域を広げてゆくなかで火を使うようになり、少しずつ定住化を進めていった。

原人たちの拡散と定住化の過程で、ヨーロッパのハイデルベルグ人やネアンデルタール人のような旧人たちが生まれ、旧人たちは石器の加工技術をさらに進化させ、棍棒を槍へと発展させたり、石器や骨角牙器に柄をつけたりして、石器などの使用範囲を拡大した。旧人たちは、原人たちを大きく超えるかたちで、土木石骨文化を発展させた。群れ社会から定住化を進めた小共同体を形成し、人口規模を拡大させながら生活範囲を拡大した。ネアンデルタール人たちは中央アジアにまで進出していった。また、中央アジアのデニソワ人のような旧人も生まれて広がっていった。

モーガンやエンゲルスは、古い生活様式にとどまっていた現生人類であるサピエンスたちも野蛮の段階にとどまっていたと判断した。しかし、出アフリカを果たしたサピエンスたちは、すでに筏ないし舟を使用して移動する段階に到達しており、オーストラリアに到達する段階で刃部磨製石器を使用するまでになっていた。また、ネアンデルタール人たちの活動領域を大きく超える広域の交易関係を結んで、土木石骨文化の発展を図るようにもなっていた。

広い圏域に広がったネアンデルタール人のような旧人たちは、基本的に野蛮的共生社会にとどまっていた。サピエンスたちが旧人たちと交雑しながら野蛮的共生社会から未開的共生社会への移行を図る過程で、旧人たちはついに絶滅へと追い込まれたとみられる。

ここであらためてネアンデルタール人のような旧人とサピエンスたちの相違を考えてみると、ふたつの点での大きな違いがあったといえよう。そのひとつは、ネアンデルタール人はマンモスなどの大型の哺乳類を絶滅に追い込むようなところまで自然破壊を進めることなく、自然との共生関係を維持しながら種の存続を図っていたということである。一方、サピエンスたちは、大型動物たちを狩りつくして絶滅させ、また樹木を切り倒し森林の破壊を推し進めて住居や舟を作り、自然破壊を推し進めていった。ネアンデルタール人の社会は、サ

ピエンスたちの社会よりも自然との共生関係が強かったといえる。

そのようなネアンデルタール人たちの生活は、石器などの道具の改良と共同体の在り方の制約性をもつものでもあった。ネアンデルタール人たちは、比較的狭い範囲での資源利用にとどまり、石器の制作でも近隣資源を利用するにとどまっていた⁹⁾。しかし、サピエンスたちは、きわめて広い範囲での交易関係を取り結んだのであり、近隣では入手できないフリントや黒曜石なども交易によって入手し、その生産交易活動を拡大していった。

ネアンデルタール人たちの交換を含む交易関係は、おおむね偶然的なものにとどまっていた。それは、旧人たちの共同体の規模が比較的小さかったこととも結びついていたと考えられる。交易の拡大は、社会的分業の拡大と不可分であり、共同体内の分業が進まなければ、交易も拡大できない。サピエンスたちの市場での交換を含む交易の拡大と共同体の規模の拡大は、相即的な発展関係をもっていたといえよう。

筏や舟をも利用して広い範囲で交易を行なえるということは、共同体の規模を大きくすることを可能にする。共同体間の結びつきを強めれば、近隣の生活資源では得られない資源を獲得し、孤立的な共同体では得られない広域の情報を入手できる。余剰生産物を交換できるようになれば、共同体内の生産規模も拡大できる。交易関係の拡大をともないながら、サピエンスたちはその生活空間を拡大していった。それはまた、ネアンデルタール人たちを大きく超える生産規模の拡大をもたらすとともに、自然破壊をさらに進めてゆく過程でもあっ

⁹⁾ ネアンデルタール人の生活範囲と共同体規模の制約性ということは、一世紀ほど前の1930年代になされたテシク・タシュ洞窟のネアンデルタール人の研究によって、明らかになっていた。その研究を主導したアレクセイ・P・オクドラニコフの報告書は、後期終石器時代以降の石器時代の制作者（つまりサピエンスたち）は、「フリント材の石質の如何を見極めることができただけでなく、交換を通じて遠隔地の原石材を獲得することにも注力していたようだ」が、「テシク・タシュ洞窟を利用したムステリアンの古人類は、石器制作において通常は近隣の地域で豊富に手に入る石材で満足していた」ことを指摘していた。ネアンデルタール人たちの研究の進展は、ネアンデルタール人たちの交換を含む交易関係の制約性と自然との共生性をより明確なものとしてきたといえよう。

た。

したがって、ネアンデルタール人たちの生産交通様式は自然破壊の抑制をと
もなうものであったけれども、旧人たちは、サピエンスたちの自然破壊を推し
進めてゆく生産交通様式の発展を抑制することができなかった。サピエンスた
ちは、ネアンデルタール人たちの生活条件を悪化させる規模で大型獣や中型の
獣たちを狩り、森林や黒曜石を含む石材などの資源開発を進め、土木石骨文化
を発展させていった。その過程は一面では発展であったけれども、他面におい
て自然破壊や動物たちの殺傷という犠牲を拡大するものでもあった。サピエ
ンスたちとネアンデルタール人たちのあいだでの紛争は起きただろうし、それは
ときに戦争のかたちをとったかもしれない。しかし、ネアンデルタール人たち
が絶滅へと追い込まれていった背後には、サピエンスたちが旧人たちの生活条
件を破壊していったことが決定的なものとして作用していたといえよう。

ネアンデルタール人に代表される旧人たちは、N型の中石器時代といっ
てよい石器の改良と着柄技術などの発展をもたらした。彼ら彼女たちは、野
蛮の共生から未開の共生へと移行してゆく過渡期の人類だったといえよう。
ネアンデルタール人たちは、死者の埋葬のような人間性の拡大を実現し、大
型獣を絶滅させるような自然破壊を抑制しつつ、その生活範囲を少しずつ
拡大した。けれども、共同体の規模を拡大しながら交易により社会的結合
を拡大していったサピエンスたちの生産交通様式の発展と、大型獣を狩
りつくしてしまうような自然破壊を推し進めるサピエンスたちの生活様
式は、旧人たちをも絶滅に追い込みつつ、未開の共生社会を発展させて
いった。

局部磨製石器を含む石器の改良、筏や舟の利用も含む交易の拡大をと
もなう生活範囲の拡大によって、出アフリカ後のサピエンスたちはN型の
新石器時代への移行を実現した。サピエンスたちは、経済社会の規模を
拡大しながら、地球上の各地へとその生活範囲を拡大していった。出ア
フリカ後のサピエンスたちは、新石器時代への移行と発展を経済的基礎
として土木石骨文化を発展させ、さらに金属器を使用する社会へと未
開社会を発展させていった。

ネアンデルタール人たちのN型の中石器時代は、サピエンスたちのN型の新

石器時代へと移行してゆき、ネアンデルタール人のような旧人たちはその過程で絶滅した。というよりも、絶滅させられた。出アフリカ後のサピエンスたちは、前文明社会の段階ではあったけれども、これまで中期旧石器時代とよばれてきた旧人たちのN型中石器時代を終わらせ、後期旧石器時代とよばれることが多かったN型新石器時代を発展させた。サピエンスたちは、動物の飼育や穀物生産へと生産様式のさらなる発展を図りながら、青銅器や鉄器などの金属器生産社会へと移行してゆくことによって、文明社会の基礎を築いていった。

日本列島史の再認識

この過程をふまえて日本の列島史を振り返るならば、後期旧石器時代から縄紋時代へと移行したのだと理解してきた日本の考古学研究そして古代史研究の理解は改める必要があるだろう。サピエンスたちのN型新石器文化の発展過程で土器が発明され、土器の製造と使用を開始したことによって、日本では縄紋時代とよばれる時代が到来した。大陸からの稲作や金属器の導入によって、縄文時代は弥生時代へと変化していった。弥生時代は金石併用時代でもあり、弥生時代の経済社会の発展過程で支配階級と被支配階級の分離が明確化していった。その帰結として、日本列島の諸社会は古墳時代へと移行していった。このような日本列島のサピエンス史の展開は、連続的なものであった。石器時代の認識と土器使用時代の認識は、統一的になされるべきである。そのように理解するならば、後期旧石器時代認識と縄紋時代認識との断絶は克服できよう。

また、まだ狩猟や漁労を主たる生業としていた時代であっても、局部磨製石器を使用し、筏や舟を利用しつつ、広域の交易関係を通じて入手したフリントや黒曜石を使って細石刃を利用するようになったサピエンスたちは、新石器時代への移行をすでになし遂げていた。したがって、そのうえに土器を使用するようになった段階のサピエンス文化をもつ縄紋時代を野蛮とみなすではあるまい。この点では、モーガン的な未開の理解でよいのであって、石母田正のような原始社会理解もまた、一定の修正を余儀なくされている。

そのさい、石器時代であろうと金属器時代であろうと、土木石骨文化の発展

とその基礎にある経済的な再生産様式の発展は、サピエンス文化と知性の発展の基礎にあるものとして、つねに念頭におかなければならない。石器や金属器の発展は、生産廃棄様式と交通廃棄様式の発展と不可分であった。人類の文化の発展は、経済的な消費廃棄様式との結びつきにおいて、その総体を理解しなければならぬ。経済的再生産を軽視した文化論とか知能の発達論というもの、空虚とまではいわないけれども、内実を欠いた、底の浅いものとならざるをえない。

3 未開社会の発展と文明社会への移行

植物の育成と動物の飼育

自然的自然の社会的自然化を考えると、植物の育成と動物の飼育の歴史は重要な意義をもつ。微生物や菌類の科学的利用が本格的に開始されたのは、基本的には20世紀になってからのことである。しかし、微生物などの育成と利用は動植物がたえず行なってきたものなのであって、人類史においてもその初期段階から本能的な利用と依存がなされてきた。野蛮の共生の社会でも、微生物や細菌と関連をもつ生命体の経験的な利用は、すでになされていた。

動植物の意識的利用については、その意識性の程度によって区分する必要がある。本能的なものから抜け出て、意識的な育成と利用を始めた段階は、人類史の大きな飛躍を意味するからである。植物については、野生種の採取の段階と育成化を始めた段階とを区分し、野生植物と育成植物を区分する必要がある。育成植物の栽培が小麦や稲に及んだとき、農業革命とよばれてきた過程へと移行する。だが、すでに多くを論じたように、農業革命が起こるまでには多様な育成植物の育成植物化の過程が先行していなければならなかった。育成植物を系統的な栽培化する過程が農業革命だったのであり、その前段階には何万年かの永きにわたる植物の選択と育成の歴史があった。

すでに論じたように、家畜化の過程にも似たことがいえる。永きにわたる飼育の準備過程を経て、畜産業も確立しえた。家畜というのは独特の漢字表現で、

従来、飼育動物のなかでヒツジ・ヤギ・ウマ・ウシといった特別なものを家畜とよんできた。イヌやネコのような愛玩動物も広い意味での家畜といえる。しかし、動物については野生動物と飼育動物とに二大区分するほうがよかろう。愛玩動物を含む飼育動物のなかで、ヒツジやウマのような役畜として重視されてきたものが狭義の家畜であり、狭義の家畜と愛玩動物とを区別するほうが用語的には適切であろう。とはいえ、人工的な開発と育成が進んでゆくならば、家畜も愛玩動物化し、保護の対象となつてゆこう。

このような植物育成と動物飼育の歴史をふまえるならば、文明化の序曲ともいえる農業革命や畜産革命の過程については、1万年前後の時代ではなく、5万年前ないし4万年ほど前の時代からの育成植物化と飼育動物化の歴史をふまえる必要がある。育成植物化については、食べつくさずに残すということがその端緒となる。人類にとってより有益だとみなした植物を選択的に育成するという過程がその後続くのであり、1万年、そして2万年とその過程を繰り返すなかから、その地域に定住したサピエンスたちの好みに合致した植物相が選択されることになる。環境の変化がたえず作用するなか、地域の環境によって植物の種類は異なってくる。熱帯ではヤシやイモやバナナなどが選択されたであろうし、亜熱帯から温帯地域でもイモは重要であった。気候条件しだいで、ブドウやイチジクなど、利用できる植物は多くあった。亜寒帯や寒帯の地域でも、ドングリやクリのような堅果類の選択的育成はなされていた。

サピエンスたちは、飼育動物化の永い過程をへて家畜の種類を増やしていった。動物についても、狩り尽くして絶滅させることの愚をさとったサピエンスたちが、狩り尽くさない知恵をもち始めたことで、飼育化の端緒が始まった。イヌはもっとも早い時期から飼育されてきた動物であったようで、おそらく2万年から1万5千年ほど前の時代からのオオカミの飼育動物化によって、各種のイヌが生まれてきたのであろう。イヌは狩猟を援ける役畜でもあったし、人間が愛情を注ぐ愛玩動物でもあった。ヤギやヒツジやブタが家畜化されたのは1万年前を前後する時期からのようだが、野生のヤギやヒツジやシカなどを狩り尽くさず、一定の地域で保護しながら狩りをするということは、出アフリカ

後の賢いサピエンスたちは、あまり間をおくことなく始めたようである。イノシシを一定の地域に移動させて保護し、一定の秩序をもって狩りをするということを繰り返すなかから、しだいにイノシシのブタ化のような家畜化が進んだのだと考えられる。

このような飼育動物化の永きにわたる過程をふまえるならば、飼育動物の家畜化ないし役畜化の過程を1万年前を前後する時代に始まるとみなすべきではない。サピエンスたちが土地を移動してゆく過程の背後には、植物や動物たちは無限に存在するのではないという資源制約の認識があった。その認識は、半定住化そして定住化へと進む過程で、捕り尽くさないかたちで動植物を利用する必要があるという認識へと発展していった。そこからさらに、植物の栽培や動物の飼育化へと進んでゆき、野生の小麦や稲を改良して穀物栽培を開始していった過程とも結びつくかたちで、野生動物を飼いならして家畜を飼育する過程が進展していった。穀物の栽培や家畜の飼育は、出アフリカ後の新石器時代の永きにわたる過程の、ひとつの帰結として理解すべきであろう。詳しく論ずるまでもなく、漁労についても、同様なことがいえる。

N型の新石器時代の画期的諸発明

このような植物の栽培化と動物の飼育化の歴史をふまえるならば、石器時代の捉え方の全体像を再編する必要があるだろう。従来の石器時代認識は、新石器時代というものを農業革命と結びつけすぎた。石器時代の発展は土木石骨文化の全体的な発展と結びついていたのであって、その全体的な発展過程と切り離して石器時代区分のみをしても、あまり意味はない。

猿人たちが石器を作り始めた時代から石器時代が始まるとみてよいのだが、その内部区分をいま一度、簡単に整理しておこう。N型の石器時代は、旧石器時代(打製のハンドアックス用い始め、打製の骨器なども使用するようになり、火を利用するようになった段階)、中石器時代(ルヴァロア技法のような石器作りの技術を発展させ、木の槍を使うようになり、石器に柄をつける着柄技術を使って石器を改良していった段階)、新石器時代(局部磨製石器とりわけ刃

部磨製石器を使うようになり、磨製骨角牙器も使用するようになった段階)に区分できる。旧石器時代は猿人と原人の段階に、中石器時代は旧人の段階に、新石器時代は新人の段階に対応するといつてよい。

刃部磨製石器の出現は、2010年代の後半にオーストラリアで4万7000年前(一部に6万年前という説もある)にさかのぼるものであることがほぼ判明した。刃部磨製石斧などの局部磨製石器の出現は、樹木の伐採や加工、骨角器生産の効率性を大きく向上させたと判断できる。続いて細石刃が登場し、普及した。とくに黒曜石を用いた細石刃は、石器の性能を高めたであろう。

刃部磨製石斧の出現と使用は、筏や舟の制作と結びついていたと推定できる。日本の実験航海の経験をふまえると、丸木舟の制作と結びついていた可能性は大きい。日本でみられる台形様石器は、狩猟用具に使われたものもあるのかもしれない。だが、手斧(チョウナ)ないし鑿(ノミ)あるいは彫刻刀のようなものとして使われた可能性がある。黒曜石製のものなどは、乾燥させ、一部を焼いて焦がした木を削る道具として使われたのではなかろうか。

刃部磨製石器の出現は、木材やマンモスの牙などを含む骨角牙器の加工技術と利用可能性を広げたであろう。骨角牙器のなかには、皮をなめす道具やヤスリのようにして使うものもあったろう。そのような道具の派生的な拡充をもたらす刃部磨製石器の使用の拡大は、人工の柱と壁をもつ竪穴住居のような住居の築造を可能とし、半定住化ないし定住化を推し進める契機ともなったであろう。

かつてチャイルドが述べたような、「中石器時代は、経済的には旧石器時代の生活様式の単なる延長」とする理解は、現在でも根強く残つていよう。考慮されていないわけではもちろんないが、チャイルドの理論認識には、交通様式と交通の拡大による経済発展認識の弱さがあつたように思われる。生産様式を偏重する見方にまだ制約されており、それが彼の新石器時代認識を狭くしたといえよう。チャイルド以降の考古学者たちにも、その制約性は継承されたともいえよう。生産廃棄様式は経済そして経済社会の全体を規定する基礎となるものであり、けつして無視してはならない重要性をもつ。けれども、生産廃棄様式と交通廃棄様式は統一的に把える必要がある。

石器時代のサピエンスたちの廃棄物は、規模の大きなものではなく、その量は地球を破壊するほどの規模のものではなかった。したがって、廃棄をめぐる問題にそれほど深く立ち入る必要はさしあたりないから、廃棄様式の問題はしばらく無視することにしよう。しかし、石器時代のような人類の初期的文化状況においても、交通様式は生産様式に規定されるが、交通様式そのものもきわめて大きな意義をもつ。交通様式の一部は生産様式に組み込まれるだけでなく、生産様式から自立化した交通様式は生産様式に反作用する。生産様式と交通様式には、規定関係とともに反作用する相互関係が存するのであって、生産様式だけをみて石器時代の発展を把握することは一面的になる。チャイルドの理論は、交通関係や生活様式の全体を視野に含んだ包括的なものであったが、生産様式中心主義的な傾向を免れていなかった。その理論認識の限界がO型の中石器時代の軽視とも結びついていたといえよう。

けれども、後期旧石器時代と認識されてきたほぼ5万年前からの変化を新石器時代として把握しなおすならば、局部磨製石器から磨製石器をさらに改良していった新石器時代には、画期的な発見や発明と結びついた生産様式と交通様式の拡大がみられることがわかる。第1に、舟の生産と使用における大きな発展がみられた。出アフリカ時あるいは出アフリカ後のサピエンスたちは、おそらく丸木舟の発明に先行するかたちで、草を束ねて作った草束舟や筏を発明し、使用するようになっていたであろう。それがいつのことかは定かではないが、ホモ・フロレンシスがサピエンスたちにもその遺伝子を残したことをふまえると、5万年をさらにさかのぼるかたちで、旧人(ないし原人)たちがなんらかの舟なり筏なりを用いて島嶼部に渡った可能性はある。フローレス人たちは津波などで流されるかたちで島嶼部に移動した可能性もあるから、舟や筏で海を渡ったかどうかはまだ判然としない。

すでに言及したように、2016年と17年にオーストリアで刃部磨製石斧が発見されたことで、認識は大きく変転することになった。刃部磨製石斧の使用と丸木舟の製作とは密接な結びつきがあったことを想定できるようになったからである。両者の関係性については、学術的な検証作業が現在もお続けられている。

刃部磨製石斧は樹木の利用を大きく発展させたことを示す労働手段であり、丸木舟そのものは交通手段である。丸木舟が利用できるようになれば、広い範囲での移動が可能となり、交易の範囲は飛躍的に拡大する。十分な究明ができたというわけではないが、刃部磨製石斧の使用と丸木舟の製造と利用とのあいだには密接な関係性があったこと、また丸木舟の製造過程には一定の社会的分業関係が存在していたことは、かなりの確度で認められるといつてよいであろう¹⁰⁾。

そのような認識の変化をふまえて、以下、刃部磨製石斧が使用されるようになった、ほぼ5万年前(4万7000年前)以降の時代をN型新石器時代とよび、その内部の段階区分をしてみよう。この時代の丸木舟はまだ発見されていない。20世紀まで、丸木舟が用いられるようになったのは、縄紋時代のこととだと考えられてきた。しかし、黒潮を乗り切って日本列島に到達することは丸木舟なしにはほぼ不可能であることがほぼ実証されたこと、また3万5000年以上前から「神津島オブシディアン・シャトル」などとよばれるようになった神津島との往復路が確立されていたことなどをふまえるならば、5万年ほど前から3万5000年ほどのあいだに丸木舟が製造され広い範囲で使用されるようになったことは、かなりの確度で推定できるようになった。

加えて、日本(日本だけではないが)では台形用石斧という、ノミのように使われたとも考えられる独特の石器も出土している。黒潮を乗り切って往復できるような丸木舟を作るためには、できるだけ微細な加工を舟の外壁や内壁に施すことが必要となるであろう。台形用石斧は、狩猟用具として使われた可能性もあるが、微細な木材加工のために使用された可能性もある。

舟や筏の発明は丸木舟の発明に先行するものであり、それは人類の全地球規

¹⁰⁾ 現在の学術的研究の到達点については、岩瀬・佐野・長崎・山田・海部「後期旧石器時代前半期の刃部磨製石斧からさぐる舟の可能性」、『季刊考古学161』、2022年、参照。「前半期石斧が内陸部から出土することには注意が必要」という留保条件が付されている。だが、切り倒された大木を河川を使って運ぶことはできるし、木材を下流にある集落が入手して丸木舟を製造していたということは充分にありうる。したがって、刃部磨製石斧が内陸部で多く発見されているということは、3万年より前の後期旧石器時代ないしN型の新石器時代に丸木舟の製造がなされたことを否定する論拠にはならないであろう。

模での拡散を可能とする端緒を形づくるものとなった。けれども、人類がグローバルな展開を遂げるためには、丸木舟の発明と使用は不可欠な要素となった。アジア大環状文化圏は、日本列島へとサピエンスたちが到達したことによってはじめて形成されえた。丸木舟の発明と使用は、この大環状文化圏の形成にとって決定的な役割を果たした。また、1万4000年ほど前にサピエンスたちはアメリカ大陸の最南端に到達したが、それは陸路のみによったのではなく、舟による海路もその到達に利用されたであろう。そのような地球規模でのサピエンスの進出は、舟、とりわけ丸木舟の製造と使用なしには起こりえなかった。サピエンスたちの人口の増加も、そのような地球規模でのサピエンスの拡散を前提として起こりえた。人類史としても、サピエンス史としても、丸木舟を含む舟は、きわめて重要な意義をもつ。

第2に、刃部磨製石斧と丸木舟、また台形用石斧のような石器を別としても、5万年前ほどから石器の発展には目覚ましいものがあつた。部分的な石片の刃の取替えができる細石刃(小石刃)の発明と普及も、N型の新石器時代のことである。細石刃は、4万年以上前の原オーリニャックに出現しており、しだいに広がった。日本でも2万5000年ほど前に北海道で出現しており、その後、縄紋時代にかけて日本全国に広がった。

黒曜石が広い範囲で使用されるようになったのも、ほぼ5万年前の新石器時代になってからのことである。黒曜石は、きわめて初期的な市場交換を含む交易によって、広範囲に使用されるようになった。丸木舟のような舟を使用することによって、広い範囲での石器の交易もなされるようになった。それもこのN型の新石器時代だったといえる。

いま少し考察を加えておこなうならば、第3に、飛び道具の画期的な進化がなされたのも、N型の新石器時代のことだったといえる。サルたちも石や木を投げて攻撃する。猿人たちも石や木や骨を投げたであろう。木製の槍を使い、ネアンデルタール人のように先端に石を埋め込んだ槍まで作っていた旧人たちが、槍を投げなかったはずはない。けれども、サピエンスたちは、2万5千年前から2万年前ころまでのソリュートレ文化期にアトラトル(投槍器)を発明し、

使用した。投げ槍の技術や技能も、この時代に大きく発展した。また、弓矢の発明と使用も、2万年前を前後する時代になされたようである。

以前に論じたように、ルイス・モーガンが野蛮の中層から上層への移行の画期として位置づけたほど、弓矢の発明と使用は重視されてきた。最初の弓矢がどこで発明されたのかは定かではないが、岩窟壁画に描かれた弓矢はかなり古い。

日本には、世界最古の落とし穴の遺跡もある。最古のものとされている種子島の落とし穴は3万5000年前ころのものと推定されており、落とし穴の発明と利用もN型の新石器時代に始まった。飛び道具を含む狩猟の技術と道具の画期的な発展は、2万年前ころまでのN型新石器時代に起こったのである。

第4に、土器の発明と使用も2万年前を前後するN型の新石器時代のことだったといえるようになった。日本における土器使用の開始年代が1万6000年ほど前(1万6500年)に遡れることは、広く認められるようになった。また、前稿で紹介をしたように、2万2000年前の東南中国で最古の土器作りが始まり、一方、沿バイカル・アムール地域から北海道にかけての北東アジア圏域でも1万5000年ほど前(1万4800年前)から土器作りが始まっていた。中国の北部・中部の土器作りが1万3000年前ほどから始まったということも、専門家のあいだでかなり認められるようになってきた。

土器の発明と使用は、モーガンが野蛮の上層段階から未開の下層段階への移行の象徴として位置づけたものであった。モーガン流の未開社会への移行は、2年以上前のN型新石器時代のことだったということになる。

その他のさまざまな生活用具の発展も、N型の新石器時代にみられるようになった。針の発明もソリュートレ文化期になされた。針が使われるようになったということは、縄や紐ではなく、糸状の細い皮や繊維を用いた裁縫ができるようになったことを意味する。釣り針のような漁具の発展もそうで、ランプの発明と使用などを加えることもできる。さらに、巨石文化や芸術の発展の跡を辿るならば、これもまたN型の新石器時代に長足の飛躍を遂げたといえる。巨石文化は新石器時代に大きく発展した。けれども、日本の環状列石群にもみられるように、その端緒も中期のN型新石器時代に求められよう。

表4 文明的共生社会への移行過程

大区分	小区分	時代の転換を象徴する生産交通様式の発展	日本列島の動向
初期文明社会への移行	発展期	中心的都市国家の拡大と帝国化	小国家の連合へ
	確立期	鉄器の導入と国家の発展（金属器時代の確立）	古墳時代への移行
	形成期	青銅器使用の普及と国家の形成、文字の使用開始（金属器時代への本格的移行〔金石併用期〕）	周濠をもつ都市的集落の形成と発展
	萌芽期	都市的集落の形成・拡大と金属器の導入	方形周溝墓をもつ集落の形成
	基盤形成期	穀物農耕・牧畜の本格的な開始と持続的改良	弥生時代への移行

文明的共生社会への移行

文明社会への移行について、いまだ少し補足を加えておこう。一定の言及をすでにしたが、文明社会の捉え方は、文明の定義いかんによる。文明の発生には、経済的な余剰生産物の存在が前提となるのであり、その経済的な前提条件が成立するときに都市と村落の分離が生じてくる。文明の成立にとって決定的に重要なことは、この都市と村落との分離である。この分離とともに、余剰生産物の剰余生産物化が進められるようになり、都市に集中される国家権力というものの自立がなされるようになって、階級社会への本格的な移行が実現されるのである。

モーガンやエンゲルスは、文字の使用に求めたが、この点については再考の余地がある。青銅器や鉄器が用いられるようになった時代には、メソポタミアやエジプトの古代文明をみるだけでもわかるように、階層の分化がはっきりと進行しており、支配階級と被支配階級の分離が生じていた。したがって、都市と村落との分離が進み、階級の分裂と支配・被支配関係が明確になっている社会は、文明社会とみなしてよいであろう。

モーガンは、表音文字 (Phonetic Alphabet) の発明と文献的記録の開始を文明開始の最終的な指標とした。そのとき彼は、「石に刻まれたヒエログリフのような書き物はこれと同価値のもの」として扱った。このモーガンの認識については、若干の補足が必要であろう。というのは、「紋」と「文字」との区別と関連をふまえる必要があるからである。

文字がまだ使われていない社会であっても、縄の結び方とか石や土器に刻ま

れた紋様によって意思の伝達がなされる紋様は大きな社会的意義をもっていた。文字の使用に至る前の段階で、紋様によって意思を伝達する社会があったことは、前文明社会においても、階級間の分裂がある文明社会においても、広い範囲で認められる。中南米の古代文明で、キープという縄の結び方で意思の伝達が行なわれたことは、よく知られている。日本列島でも、『魏志倭人伝』に記されているように、一般にはまだ文字を使っていなかった弥生時代に、縄を結んで意思を伝えることが広く行なわれていた。縄紋土器の紋様は、紋様によって一定の情報伝達が縄紋時代になされていたことを示していよう。

表音文字(音標文字)と紋様は、基本的に区別されるべきものである。とはいえ、象形文字は音標文字と紋様との中間的な性格をもっており、漢字にはその性格が強く残っている。漢字は表音文字では基本的にないので、漢字を使って人の名前や地名を表記すると、その表記の仕方が一定の意味をもってしまう。レーニンを「冷人」と書くようなことがかつてなされたけれども、そのような文字の使い方が漢字ではできてしまうということに、留意をしなければならない¹¹⁾。

紋様と表音文字のあいだには、漢字のような中間的な形態が存する。漢字もそうであるけれども、インダス文字などとよばれているが、古代インドの印章や貨幣に使われた文字のように見える記号も、紋様と象形文字の中間に属する記号的紋様のようなものだったと思われる¹²⁾。文明が確立する画期を文字に求めることは、明証性をもつもののように思えるかもしれない。しかし、紋様と表音文字の中間形態が多様であることをふまえるならば、それを明確な指標とみなすことは困難である。

¹¹⁾ 漢字から受ける印象は、時代によって変化する。令和の時代となって、「冷」という漢字から受ける印象も戦前・戦時の時代とは異なっているかもしれない。しかし、漢字文化のなかでは文字を使い方そのものがプロパガンダとなりうる要素が含まれているということは、文化の在り方として留意しておかなければならない。

¹²⁾ 古代のインダス文字については、長期にわたる研究史と論争史がある。日本でも、堀暁たちが指摘しているように「インダス文字は文字ではない」のだろう(堀暁『古代インド文明の謎』、吉川弘文館、2008年、参照)

4 アジア大環状文化圏の認識をめぐって

文明社会の発展と文化の発展

以上の認識をふまえることによって、アジア大環状文化圏の形成過程に関するさらなる分析の基礎を確立することができる。この大環状文化圏の形成過程は、文明の発展と結びついた文化の発展過程の史的分析を必要とする。最初期の古代文明、すなわちメソポタミア文明とエジプト文明以降の文明と文化の発展過程をふまえたうえで、このアジア大環状文化圏における文明と文化の発展の分析を深める必要がある。

ここではまだ、その分析に立ち入ることはできない。だが、その一部については、少々、予告的なかたちで言及しておこう。まず、例証として、アジア全域への広がりをもつレスリングや相撲の起源とそれらの発展過程についてのみ、要約的に記しておく。研究を少し推し進めるならば、古代のエジプト文明とメソポタミア文明に、それぞれの起源があることがわかる。レスリングの起源地はエジプトに求めることができ、相撲の起源地はメソポタミアであったといえる。いうまでもなく、両文明の相互交流の歴史の過程で、レスリングと相撲の技をめぐる交流はなされたであろう。

しかし、レスリングと相撲は異なる性格をもち続けた。というのは、エジプトの下着は布を折って縛るだけのものだったので、下着をつかんでの組合いではできなかったからである。エジプトで形成された原レスリングは、ギリシアに伝播し、古代のオリンピック競技の一端を担うことになった。古代ギリシアの壺にも描かれているように、ギリシアのレスリングは、全裸でなされた。しかし、レスリングはやがて、パンツをはいて競うスポーツともなった。ベルトなしの着衣でも、それはなされたであろう。

相撲の起源地となったのは、メソポタミアである。イラク戦争の渦中で行方がわからなくなってしまったが、紀元前三千年紀のものとされるイラクの「相撲型脚つき壺」がそれを明確に示している。この壺の脚の部分には、ふたりの人物が取組みをしている。両者の下着は明らかにフンドシである。この壺は相撲(そし

てフンドシ)の原型がメソポタミア起源のものであることを明確に示している。

相撲とレスリングの決定的な相違は、相撲には、互いにつかんで組みあうための帯ないしベルト状のもの、あるいはフンドシが必要だという点にある。相撲は全裸ではできない。すぐにほどけてしまうような腰巻や、つかむことができないパンツでもできない。互いにつかむことができるフンドシのようなもの、あるいは帯やベルトのようなものが、相撲には不可欠である。

メソポタミアとエジプトで相撲とレスリングの原型が確立されると、相撲もレスリングも、一定の変容をとめないながら、それらは世界各地に広まっていった。それらはアジア大環状文化圏にも広がった。その伝播と変容の過程で、パンツとフンドシという下着の文化、あるいは掴み合いのできるベルト状のものを使うか使わないかという相違と結びついて、相撲の文化とレスリングの文化は差違をもつようになった。

モンゴル相撲とよばれているものは、基本的にはレスリングの系統に属する。けれども、ズボン状のものを身につけたり、帯やベルトのようなもので着衣を締めたりして組みあうときには、相撲に近い取組みをなした。フンドシが普及した地域では、相撲の文化はフンドシ文化と結びつくたちで継承され、発展していった。日本はその典型国のひとつとなった。下着としてのフンドシを基礎として廻しが形づくられ、土俵の内部で勝負をすることによって、国技としての独特の形式をもつようになったのである。

アジア大環状文化圏では、レスリング文化の影響を受けつつも、下着の文化とも関連をもつたちで、相撲の文化が広く根づいている。とくに南方や東方では、フンドシ文化が広い範囲で普及したので、土俵のあるなしにかかわらず、相撲文化が浸透した。中世を経て近代へと至る過程で、相撲は、スポーツとか競技とかをめぐる文化にとどまらず、さまざまな方面にわたる文化的影響をもつものとなっている。

そのほか、太陽と月の信仰をめぐる文化とか、蓮の花を愛でる文化とか、眉と目の表現をめぐる文化とか、お茶の文化とか、祭りの文化等々、文化をめぐる問題については、アジア大環状文化圏の文化の問題としてだけでも、語るべ

きことが数多くある。けれども、そのような考察は別の機会に回さなければならぬ。ここでは、わたしなりにアジア大環状文化圏の共通性を認識させられるようになった契機についてのみ、いまし補足を加えておくことにする。

敦煌莫高窟の蓮華太陽紋

私事というべきことだが、アジア大環状文化圏の認識に到達するきっかけは、敦煌莫高窟のいくつかの窟を見学する機会を得たことにあった。「ネパールと日本(1)」を執筆した時点では、わたしはまだアジア大環状文化圏の認識をもっていなかった。現在の中国の北方と西方の内周と外周に騎馬遊牧民の文化があり、中国の南方と東方の内周と外周に照葉樹林文化帯の文化があるということについては、ある程度の知識をもつようにはなっていた。けれども、騎馬遊牧民の文化と照葉樹林帯あるいは広葉樹林帯さらには針葉樹林帯の文化に共通するものがあるということについては、深く考えたことがなかった。

最終校正を終えた直後に、敦煌莫高窟を訪問する機会を得たのだが、その機会に莫高窟のさまざまな窟にある藻井画(天井画)に接することになった¹³⁾。それらの藻井画を見ているうちに、その紋様の派生形態ないし関連性をもつ紋様が、仏教の伝来に先立つ日本の古代社会においてもみられることに気づいた。それらの紋様と起源と伝播の経路を追うなかで、わたしはしだいにアジア大環状文化圏の認識を深め、その存在を確信するようになった¹⁴⁾。

紀元後4世紀末から1世紀半にわたってこの地を支配した北魏の時代(386-534年)に、敦煌莫高窟の藻井画には、蓮華紋と太陽紋が描かれるようになり、両者が結びついた蓮華太陽紋というべき蓮華の花弁と太陽を組み合わせた紋様が描かれるようになっていた。この蓮華太陽紋は、アジア大環状文化圏の文化

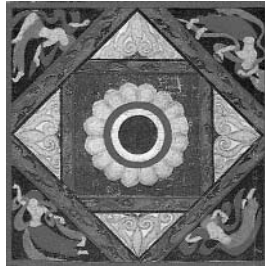
¹³⁾ 敦煌の藻井画については、訪問の前にも、多くの関連資料に接していた。しかし、莫高窟訪問時に入手した、敦煌研究院編『敦煌藻井臨品選』、陝西旅遊出版社、1997年、によって、藻井画の全体像をかなり検討できるようになった。以下の指摘は、本書によって得られた示唆から派生したものである。

¹⁴⁾ 蓮華太陽紋に関するここでの言及は、端緒的なものにすぎない。その本格的な考察は、アジア大環状文化圏の特質をさらに詳しく究明する別に機会に行なうことにする。

図1 敦煌・莫高窟の蓮華太陽紋から

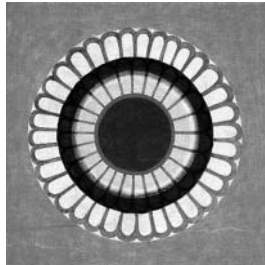
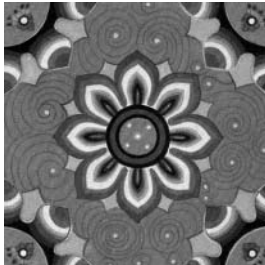
①北魏(窟号失載)

②北魏(窟号失載)



③隋代(386窟)

④隋代(296窟)



(出所) 敦煌研究院『敦煌藻井臨品選』の一部を転載。
 (注) 模写は、①②が張大千、③④は劉玉権ら、による。

的特質とその伝播の過程を探求する手掛かりを与えてくれる。詳しいことは別稿で記すが、ここで簡単にその形成と伝播の認識を整理しておこう。

莫高窟の藻井画には、さまざまな様式の蓮華太陽紋が描かれている。敦煌研究院編『敦煌藻井臨品選』に掲載されている模写図の一部を、図1として掲載しておく。ここでは問題の所在を確認するだけにとどめなければならないので、輪郭と形状の概要を整理するだけで充分である。図1においては、図の一部のみの掲載とし、白黒に変換するかたちで、北魏と隋の時代のそれぞれ2つの藻井画のみを紹介するにとどめておく。

図1の4つの図のうち、①と②は、20世紀の中国を代表する画家であり、考古学者でもあった張大千(1899-1983)たちが模写した、北魏時代の6つの藻井画の一部である。張大千たちの模写は、それが書かれた本来の図像を復元する

という性格をもっている。現在では、それらの一部には、どの窟の藻井画であったかわからなくなっているものもある¹⁵⁾。張大千のような復元方法に対する批判はある。しかし、それらは元の図柄を理解しやすい模写となっており、本来的な輪郭を追認識できるという利点がある。

これらの紋様の輪郭を見ると、①から④までの図像はかなり異なるもののように見えよう。これらのうち、①と③は蓮花紋であることがすぐにわかるであろう。また、③は菊花紋のようにも見えるであろうし、ヨーロッパの教会にあるバラ窓の紋様のようにも見えよう。

これらのなかには、ヨーロッパやイスラーム圏の紋様にも継承されているものもある。地域と時代を異にすると、同じような紋様が異なる意義づけをもつものとなる。しかし、莫高窟のこれらの紋様は、仏教の影響のもとに描かれたものであり、すべて抽象化された蓮華紋様としての性格をもつであろう。図の色付けについての考察は基本的に省略するが、中心部分が赤色で塗られているのは上部の①のみで、その他の図の中心部分の円は濃い緑か薄緑で描かれている。

したがって、これらはすべて蓮華紋であるけれども、中心部の円が太陽を模したものであることが明瞭なのは①のみである。この蓮華紋と太陽紋を組み合わせた紋様を蓮華太陽紋とよぶことにしよう。これらの蓮華紋の外側の紋様とか、その他のさまざまな藻井画との比較検討については、さらに解説を加えるべき点が少なからずある。けれども、当面は、この程度の特徴をふまえるにとどめておく。

蓮華紋および蓮華太陽紋をめぐる疑問

調査を少し進めるならば、円形と結びついた太陽紋は、きわめて古い時代から存在することがわかる。円形と太陽を重ね合わせることは、誰でもすぐに思いつ

15) 張大千の模写に一部は、それらがどの窟の藻井画を復元してものかわからなくなっているものもある。前掲『敦煌藻井臨品選』は、「(窟号失載)」という注記を付しているが、図1の①②の北魏の藻井がどの窟のものかは、すでにわからなくなっているようである。

きそうなことであり、サピエンスたちは、太古の時代から太陽を円形で描いてきた。蓮華紋様は、古代エジプト文明の時代から、連綿と重視され続けてきたこともすぐにわかる。花を愛でる文化はネアンデルタール人の時代からあり、花卉紋様も先史時代からあった。文字が出現するはるか以前から、ハスの花を愛でる文

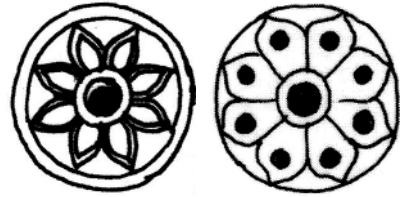
化と蓮華紋様は形づくられていた。さらに、①のような蓮華と太陽を組み合わせた蓮華太陽紋も、かなり古い時代からあった。蓮華紋と太陽紋の最古の起源を確定することは、まず不可能といってよい。けれども、敦煌莫高窟の藻井画に見られるような蓮華太陽紋の原型が形づくられたのはどこであるか、またそれに類似する紋様にはどのような関連性があるのかということは、すぐに想い浮かぶ疑問であろう。わたし自身もそうであり、これらの蓮華紋様に接して考え始めたとき、さらに研究を深めなければならないと思った疑問がいくつも浮かんだ。その主要なものとしては、以下のようなものがあった。

第1に、少し調べると、莫高窟の①の蓮華太陽紋は、中国や日本などの古鏡の裏面にある内行花紋ないし連弧紋とよばれてきた紋様と似ているということがわかる。ではなぜ、古鏡の紋様と仏教遺跡の藻井画とのあいだに類似性があるのだろうか。このような疑問は、古鏡を少しでも研究した人ならば、すぐに浮かぶものであろう。

第2に、これらの蓮華紋と古くからあるさまざまな花紋、とくにヒナゲシ紋様などと考えられてきた紋様、ヨーロッパ諸国の教会などに広くみられるバラ窓の紋様、そして日本の天皇家の掬の御紋といった紋様とはどのような関連があるのだろうか、といった疑問である。このような疑問も、多くの人が懐くであろう。

第3は、やや特殊な疑問といえるが、図1の③の紋様は、ティラウラコット遺跡の近くにあるサグラハワ遺跡から出土した蓮華紋様に似ているということ

図2 サグラハワで出土した蓮華紋様



Basanta Bidari, *KAPILAVASTU*. 所収の図の一部を転載。

をめぐる疑問である。サグラハワというのは、ゴータマ・ブッダの一族であるシャカ族の墓として知られている遺跡である。図2で示したものは、20世紀初頭に発掘されたときの画像の模写である¹⁶⁾。かなり特殊な疑問ではあるけれども、ネパールと日本に関する問題を考えるときには、避けては通れない疑問である。この紋様の起源を辿ってゆくと、古代のメソポタミア文明やペルシア文明との結びつきをもっていることがわかる。その関連の在り方の探求が求められることになる。

第4に、蓮華太陽紋の起源が古代エジプトの蓮華紋と太陽紋にあることは、少し調べればわかる。また、古代のメソポタミア起源の文化が、アケメネス朝ペルシアの文明と文化に継承され、さらなる派生形態を生んでいった過程をめぐる疑問へと連なってゆくものとなる。したがって、これらの疑問はすべて、古代エジプトの蓮華紋と太陽紋の融合と伝播をめぐる疑問へと帰着する。

敦煌莫高窟の藻井画に接したのち、わたしはこれらの謎解きに取り組むようになった。古代のエジプトの蓮華紋と太陽紋が、またメソポタミアの花弁紋様と太陽紋が融合し、伝播しつつ変容してゆく過程における、ネパールの蓮華太陽紋、敦煌の蓮華太陽紋、ヨーロッパ諸国の花弁紋様、日本の内行花紋や菊の御紋などの文化的繋がりとその変容の過程を考えてゆくことになった。その過程でアジア大環状文化圏の認識の確立と深化が図られてゆくこととなったのである。

古鏡の蓮華太陽紋をめぐる疑問

これらの問題についての本格的な考察は、ここでの課題ではない。けれども、いままし、疑問点に関する解説を加えておいたほうがよかろう。というのは、第1の疑問の端緒は、日本で作成されたことが確実な古鏡である、北九州の平

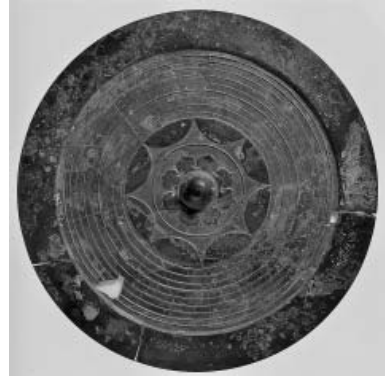
16) 図3として示したものは、Basanta Bidari, *KAPILAVASTU: The World of Siddhartha, Second Publication*, Printed in Nepal by Hill Side Press. 2007. p.143, p.146 掲載されている図の一部を転載したものである。この図には原図があり、それは別の機会に紹介し、検討する。わたしがサグラハワ遺跡の蓮華紋ないし蓮華太陽紋を想起したとき知っていたのは、本書に掲載されていた図だけであった。KAPILAVASTUに掲載されていた図を掲載したのは、そのような経緯をふまえたことによる。

原王墓¹⁷⁾から出土した仿製鏡の背面の紋様と似たところがあるように思えたことにあったからである。

平原王墓から出土した巨大な銅鏡の背面の紋様を図3として掲載するが、この背面の紋様は、高橋健自(1871-1929)によって「内行花紋」と名づけられた紋様である¹⁸⁾。この内行花文鏡の紋様は、中央アジアや中国の鏡の紋様として広く知られてきたものだが、その紋様には蓮華太陽紋との共通性がある。仏教が日本列島に伝播するかなり前に、この蓮華太陽紋

に似た紋様は、弥生時代から古墳時代にかけての北九州の支配者層の心を捉えていた。それは、中央アジアと日本列島とのあいだに文化的な結びつきが当時すでにあったということを示唆するものであるように思われる。ここには2009年の論稿で示唆しておいた「ハスの道」をめぐる大きな謎がある。敦煌研究院『敦煌藻井戸臨品選』の模写を見ていたとき、わたしの脳裏に浮かんだのは、そのような疑問であった。そのことについては、ある研究会で言及したことがある¹⁹⁾。

図3 平原墓出土の古代最大の鏡



伊都国歴史博物館『国宝 福岡県平原方形周溝墓出土品図録』より転載。

17) 平原王墓は、ときに方形周溝墓と特徴づけられている。けれども、弥生時代の家族墓としての方形周溝墓と平原王墓とは、その性格においてまったく異なっている。方形周溝墓には個人墓としての性格をもつものもあるけれども、人に対する方形周溝墓の規模と大きく異なる。「平原方形周溝墓」という名称は、伊都国博物館などでも用いられてきたけれども、弥生時代の一首長墓という位置を与えられており、適切なものとはいえない。平原墓は封土をもつ高塚古墳と区別すべきであるともされる。けれども、あとでもう一度立ち返るが、それはかなりの高さの封土と周溝をもつ、かなり大きな古墳といえるものである。鉄製品を含みきわめて豊富な副葬品をともなっている。多くの研究者たちが指摘してきたように、それは王墓と位置づけてよい古墳である。

18) 高橋健自『鏡と剣と玉』、富山房、1917年、参照。

19) 2010年から2012年にかけて、わたしは「カピラヴァストゥ研究会」という研究会を組織していたことがあった。この疑問については、その研究会の席で報告したことがある。

敦煌莫高窟の蓮華太陽紋には、中国や日本などの古鏡の裏面にある紋様との共通性がある。それはなんらかの共通する文化的な伝統を継承しているからであろう。鏡には太陽との重なりをもつ道具としての意味が古代からある。したがって、ある意味においてそこに類似性がみられるのは当然のことであろう。さまざまな紋様が問題となるのだが、とくに、日本で作成されたことが確実な古鏡である、北九州の平原王墓から出土した古鏡の背面の紋様と似ている。

内行花紋（花文）は、古代史研究者や紋様研究者にはよく知られている。念のため、図3に平原王墓から出土した国内最大の内行花紋鏡のコピーを掲載した。図3と図1を対比して見るならば、北魏時代の藻井画の模写である図1の①の紋様と、図3で示した内行花紋とのあいだに類似性があることは、容易に見てとることができよう。

内行花紋とよばれるようになった紋様は、蓮華太陽紋の中国的変形のひとつである可能性もある。しかし、それはむしろ、中央アジアの伝統と結びつきがある紋様だったように思われる。では、古鏡の内行花紋と蓮華太陽紋とのあいだには、どのようなかたちでの結びつきがあるのだろうか。その起源地を確定することはできないが、その伝播の仕方には地域的な特性があるように思える。主として蓮華太陽紋が流布していた地域と、内行花紋が主軸となっていた地域にはその性格が異なっているようでもある。

また、莫高窟の蓮華太陽紋と内行花紋のあいだには、いくつかの差異もある。北魏藻井画の①の太陽紋は二重になっていて、その周囲を8枚の花弁が二重に、つまり合計16枚の花弁が取り巻いている。平原王墓の内行花紋鏡は、中央部分は紐を通す鈕（つまみ）の部分である。この部分を太陽紋と重ねて理解してよいかどうかについては、疑問の余地がないわけではない。平原墓の場合もいちおう花弁とみておくが、その花弁部分はいわゆる八葉である。これが花弁なのかどうかについても、疑問の余地がないとはいえない。他の古代鏡と同様、内行花紋鏡一般にいえることだが、花弁の数は4枚、6枚、9枚のものなどがあり、平原王墓の場合でも他の鏡は4枚となっている。

敦煌の藻井画との相違はほかにもある。連弧紋は一般に光の表現と解されて

いるが、図1の①では「連弧紋」が明瞭ではなく、その他の藻井画でも連弧紋はしばしば花卉の背後に隠れている。しかし、平原王墓の巨大鏡では、連弧紋が外側にくっきりと刻まれている。図3の内行花紋鏡は、日本でこそ花紋(花文)鏡とよばれているが、中国では一般に、この紋様をもつ鏡を「連弧紋鏡」とよんでいた。つまり、日本で内行花文鏡とよばれてきた鏡は、連弧紋鏡の一種なのである²⁰⁾。この点をふまえるならば、連弧紋の中心部分はハチスではなく、太陽であるということになる。

なお、連弧紋を太陽光の表現ではなく、星の光の表現から発展したものとする解釈もある²¹⁾。しかし、そのような解釈は、後世からの解釈にすぎず、確固たる論拠をもっているわけではない。連弧紋ないし内行花紋が星形紋から発展したのだという解釈も、後世のひとつの解釈にすぎない²²⁾。連弧紋は太陽の光の表現であるとみるほうが、素直な解釈であろう。

このような種々に解釈されてきた連弧紋と蓮華太陽紋とのあいだには、なんらかの結びつきがあるのだと解される。古鏡の連弧紋と蓮華太陽紋とのあいだの結びつきは、中央アジアにも、北インドにも、そして日本にも共通する太陽信仰と蓮華を愛でる文化との結びつきを示しているのではなかろうか。また、敦煌莫高窟の藻井画にみられる蓮華太陽紋は、仏教の伝播と仏教以前からある

20)「わが国では内向きの花卉状の文様を花に見立てて内行花文鏡と呼ぶが、中国では光の光芒表現とされ、外に配された雲雷文との組み合わせで、光と影を組み合わせた陰陽説を反映した文様といわれ、連弧文鏡と呼ばれる」(伊都国歴史博物館『国宝福岡県平原方形周溝墓出土品図録』、63ページ)。

21)たとえば、樋口隆康(1919-2015)は、連弧文は「商代銅器にある星形文(図39)から発展した文様であると考えられる」としたうえで、「後漢代の内行花文鏡が、この流れであることはいうまでもない」と位置づけを与えた。樋口隆康『古鏡』、新潮社、1979年、71ページ。

22)樋口が「商代銅器の星形文」だとした図39の紋様も、その中央部分には円形が組み込まれており、その円形は太陽を示していると解釈できるものでもある。中央の円形が太陽だとすると、円形の外部にある星形に見える紋様も太陽光のひとつの表現なのではないかと解釈することも可能である。これが星形紋だということをかりに認めたととしても、古代世界においては連弧紋に似た太陽光の表現のほうがはるかに多いのだから、「連弧文は星形文から発展した」という主張には、さほどの説得力はなさそうである。

太陽信仰と蓮華を愛でる文化との融合を示唆するものだったのではないだろうか。ここにアジア大環状文化圏の形成史をめぐる、そしてあらためて探求しなければならない課題があろう。

小 括

わたしは2013年度にネパールでの在外研究をする機会を得た。そのときさらに深めたいと思っていた研究課題のひとつは、ネパールのサグラハワ遺跡から出土した遺品の調査であった。そのような課題認識をもつにいたった背後にあったものが、いま述べた蓮華太陽紋をめぐる疑問である。

この問題は、サグラハワ遺跡からの出土品がどの時代のものなのか、という問題と不可分であった。そのためにはサグラハワ遺跡からの出土品そのものの分析を試みなければならないが、そこには大きな障害があった。サグラハワ出土の遺品そのものの行方が、いまだにわからないからである。そのことについての詳細は、別稿で記すことにする。

アジア大環状文化圏をめぐる究明しなければならない問題は、そのほかにも数多くある。けれども、それらの派性的諸問題を解明することは、現状では必ずしも容易なものではない。というよりもむしろ、きわめて大きな困難がそこには存在している。太陽紋と蓮華紋の起源とその伝播がもつ意味についても、もっと深く考えてみなければならない。それらの問題の究明は、アジア大環状文化圏の多様性や断断性を貫く共通性を明確にするという意義をもつものとなる。別の機会に、あらためて取り組むこととしたい。